

### 3 横須賀市内コース③

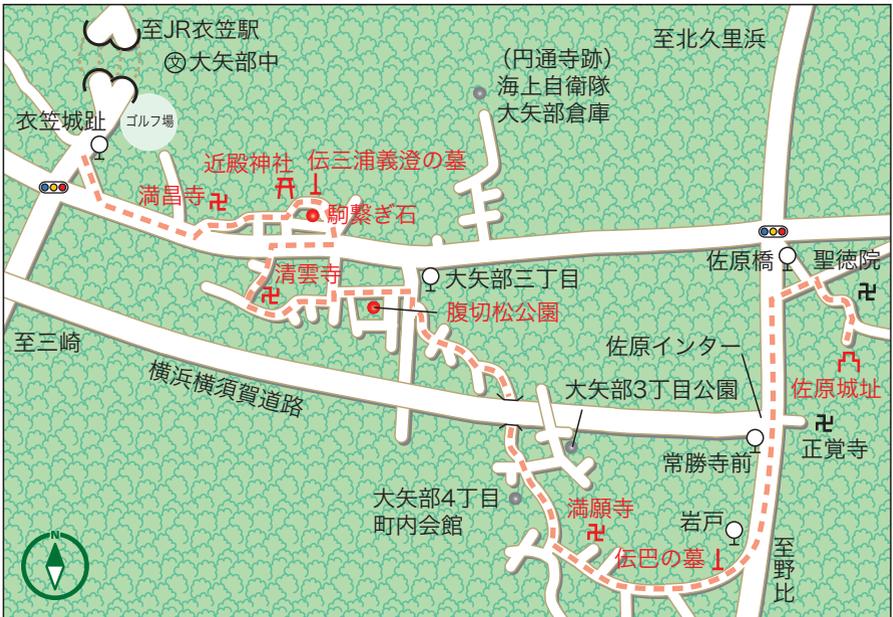
- ◆ JR横須賀駅 — ◆ バス停衣笠城趾 — ◆ 近殿神社
- ◆ 伝三浦義澄の墓 — ◆ 清雲寺 (伝三浦氏三代の墓) — ◆ 腹切松公園 — ◆ 満願寺 (佐原義連の墓)
- ◆ 伝巴の墓 — ◆ 佐原城址

#### 近殿神社

『新編相模国風土記稿』(一八四一年成立)には「近殿明神社」とある。社殿が造営されたのは、文化元年(一八〇四)以降といわれる。六代衣笠城主・三浦義村の木像(坐高三十五詢)をご神体として祀り、境内には、家紋を刻んだ旧石宮がある。義村を祀る神社は、横須賀市の鴨居に近戸

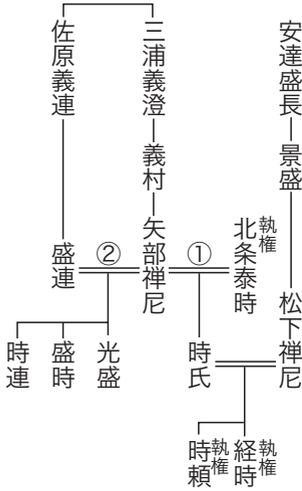


三浦義村の木像(一木造り・玉眼)



神社、大津町に千片神社ちかたがあったが、文字こそ違うが、「ちかどの」「ちかた」「ちかど」というのは、義村を指すようである。

ここ矢部郷は、三浦氏惣家の屋地である。三浦義澄を矢部次郎と呼ぶのも、義澄の後室こうしゅうを矢部尼公と呼ぶのも、佐原盛連の後室を矢部禅尼と呼ぶのも、皆、矢部に居したことによる。嘉禎三年（一二三七）六月、北条時頼が、佐原盛連の遺領安堵あんどの御下文みくだしづみを矢部禅尼に届けた地もここである。この時頼こそ矢部禅尼の愛孫で、のちに執権となる人物である。



伝三浦義澄の墓

臨濟宗薬王寺跡（市指定）に三浦介義澄のもの伝え



伝三浦義澄の五輪塔

る五輪塔がある。三個重ねた変形で、地輪ほんしに梵字を刻み穴をあけ、そこに納骨し  
たらしい。

薬王寺は建暦二年（一一二二）、侍別さむらいべつ当和田義盛が、父杉本義宗と叔父三浦義澄を弔うために創建

したと伝える寺である。この寺の屋根瓦と思われるものが近殿神社境内から出土し、これらは、和泉国（大阪）で焼かれた京都の壬生寺や石清水八幡宮、鎌倉極楽寺の瓦と同紋様であることが判明している。三浦氏と京都との深い関わりを示すものである。

山門は、南側の駒繋ぎ石の辺りにあった。明治初年の廃仏毀釈まぼくにより廃寺となり、本尊の薬師像は同宗派の満昌寺に移され、本堂の西北にあった五輪塔だけが残されたというわけである。

清雲寺（臨濟宗）

縁起によれば、清雲寺は、二代衣笠城主の三浦義継が、父為繼（一一〇八年没）のために創建し、父に似せた毘沙門天（県指定）を彫らせ本尊としたという。しかし、その造立は義継の時代ではなく鎌倉後期であることから、運慶の系統を引く仏師の手によるものとみられている。この毘沙門天の特徴は、兜を外すと結髪が彫られていることである。見えない部分まで細工が行き届いた珍しい像である。

現在の清雲寺の本尊滝見観音は、円通寺（廃寺・近殿神社の東北側にあつた）の本尊であつたが、江戸後期、この寺に遷されたものである。縁起によれば、この滝見観音は、三浦為通（一〇八三年没）が宋から請来したというが、その造立は、南宋時代（一一二七～一二七〇）であつて、年代が合わない。承久の乱後、宗像社領（福岡市）の預所となつた三浦泰村が、大陸貿易をする中で請来したものと考えられるのである。

この滝見観音は、お膝を立てた半跏像（最近では遊戯像ともいう）である。中国産の堅い桜桃の寄木で造られ、目は黒曜石のようなものを嵌め込み、毛髪、瓔珞（胸飾

三浦氏が宋から請来したと伝える滝見観音像（国指定）



り）などは、中国独特の練り物で作られている。

本堂裏に三浦為通、為繼、義継の三代の墓と伝える五輪塔がある。為通と義継のものは、円通寺の廃寺により

昭和十四年、和田九十三将のものと伝える五輪塔群とともに移されたものであり、文永八年（一一七一）五月銘の墓名盛信の板碑もそうである。



伝三浦氏三代の廟所（市指定）

腹切松公園

清雲寺蔵「三浦系図」によれば、衣笠城落城の際、三浦義明は、薬王寺の山門辺りの老松の下で自害したとされ、御霊木と称するものがあつた。現在、少し離れた場所の腹切松公園には、何代目かの腹切りの松と称するものが植えられている。

満願寺（臨済宗）

竹林を背景とした風情ある地に、満願寺はある。本尊は釈迦。開基は三浦義明の末子佐原義連と伝える。義連の子家連が、京都泉涌寺の開山俊苧を三浦館に招き梵宇を供養しているが、その梵宇とはこの寺であろう。家連はのちに肥前守となるが、このような高僧を招くことができたその財力を偲ぶことができる。

昭和六十三年、境内を発掘した際、瓦溜りが二か所、墓が一基、十三〜十四世紀の土器、釘などが発見された。古瓦の中には、鎌倉永福寺や鶴岡八幡宮二十五坊跡から出土したものと同類のものが含まれていることから、創建は、十二世紀末の可能性が高い。創建当初、ここは沿岸地域であり、寺域は、今より数倍あつたことが判明し

ている。

佐原義連は、寿永二年（一一八三）二月、源義経に従って一谷戦に加わり、鴨越の難所を先駆けし、勝利を導いた武将として『平家物語』に登場する。義連の法号は満願寺殿である。境内に彼の五輪塔があるが、福島県喜多方市熱塩加納町満願寺（廃寺）にも、伝義連の五輪塔が残されている。

義連の生没年は確かではないが、寺伝によれば、観音像は、義連十九歳が平家追討に赴く際、自らの等身大の肖像を彫らせ戦勝を祈願し、凱旋して願が満ちたことから満願寺と号したという。高く結い上げた宝髻、顎が張った男性的な面相、量感に富んだ堂々たる体躯は、武



像高224㎝の堂々とした観音像  
（国指定）



像高約2禪の地藏像（国指定）  
運慶派の地方仏師の作による

芸で鍛えた大男義連の力強さを伝えている。腰をひねり膝を曲げた形姿から脇侍とみられ、その大きさから、中尊の阿弥陀は丈六であつたと考えられている。

観音、地藏の両菩薩とも、頭部は差し込み、寄木造りの玉眼で、義連が没する前後の造立とみられている。市内では、芦名浄楽寺の阿弥陀三尊に次ぐ秀作である。

毘沙門天、不動明王の両像（市指定）は寄木造り、玉眼。小さめだが量感がある。毘沙門天は鎌倉後期の制作とされるが、作者は不明である。

### 伝巴の墓

民家の小高い畑地の先端に、五輪塔が二基みえる。巴とまの墓と伝えるようになったのは江戸後期で、佐原一丁目

にもそう伝えるものがあるが、いずれも疑わしい。『源平盛衰記』によれば、巴は、木曾義仲の愛妾で、義仲の死後、和田義盛に請われてその妾となり、あの豪壮な朝比奈義秀を生んだとするが、義仲が戦死した元暦元年（一一八四）、すでに義秀は九歳であるから、年齢が合わない。全くの創作である。

### 佐原城址

聖徳院の奥の台畑という小山が、佐原義連の居城と伝える佐原城址である。

義連は、奥州藤原合戦の後、会津四郡（福島県）の地頭職とくしを給され、和泉、紀伊両国の守護となっている。遠



佐原城址の碑

## 怒田城址

衣笠城の出城である。衣笠合戦の際、和田義盛がここ怒田城に籠るよう進言したが、三浦義明は衣笠城で戦うことこそ意義があると反論した場面が『源平盛衰記』にある。二千坪余あったというが、昭和十七年、京急線敷設のため、本丸跡など半分以上が削られた。城の東側が船倉で、衣笠合戦の際、城を脱出した三浦義澄らは、この船倉に用意してあった船で安房落ちしている。丘下の舟倉町という地名はその名残りである。

(JR久里浜駅下車)

州灘に面した遠江国笠原庄(静岡県)の地頭でもあった。子家連は紀伊守護や肥前守を歴任し、紀伊守護は、家連の子光連に継承され、その支配は、宝治の乱で惣家泰村に連座して滅びるまで続いている。